SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

遠州観音山における景観整備と地域振興：特に山頂付近の修景計画とその実行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 征司, 矢澤, 速仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005711

遠州観音山における景観整備と地域振興
—特に山頂付近の修景計画とその実行—

藤 本 征 司*・矢 澤 速 仁*

Landscape Improvement and Regional Development at Mt. Kannon of the Enshu region, Shizuoka Prefecture
—Especially on the Landscape Planning and the Execution near the Summit of Mt. Kannon

Seishi FUJIMOTO* & Hayahito YAZAWA*

Summary

For the purpose of landscape improvement and regional development in the Enshu region, Shizuoka Prefecture, we tried to draft a landscape plan near the summit of Mt. Kannon and then executed the scene plan including the construction of a Mt.Fuji sightseeing tower, et al. Regional landscape always opens as a multi-spectral scene prior to the aggregate of the objective piece things including us as substantiated subjects separated to each other. Therefore, Mt. Fuji, the most famous spectacle in Japan, is merely shown as a part of such scene as well as another landscape elements. In such the concept as mentioned above, we discussed on the method of the landscape improvement and the regional development in particular reference to the landscape improvement near the summit of Mt. Kannon.

はじめに

近年、山村域、里山域の地域振興を目的として、そのバックグラウンドを構成する森林景観・自然景観の整備が試みられるようになってきている。静岡大学上阿多古フィールドが位置する遠州観音山周辺においても同様で、これまでにも、いくつかの景観整備が行なわれてきた。しかし、これまでの試みは、上阿多古フィールドにおける場合も含め、必ずしも、今後のあるべき森林景観（森林風景）の抽出を前提とした修景とであったとは断定できず、たぶんに試行錯誤的な試みに留まるものが多かったと考えられる。そこで、本研究では、上阿多古フィールドの観音山山頂周辺において、景観整備に関わるいくつかの実践を試み、その成果や結果を分析することなどを通して、今後の地域振興を目的とした森林景観整備のあり方などについて考察することにした。

なお、本課題は、静岡大学農学部附属地域フィールドセンター森林学研究室に在籍していた、金子智明、徳永咲子、寺嶋泰子、佐野智一、土江奈緒美、大橋紀子、吉藤祐子の諸氏・諸嬢と共

＊静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター　静岡市駿河区大谷 836

Center for Education and Research of Field Sciences, Faculty of Agriculture, Shizuoka University.

同で展開したものである。また、この課題のメインといえる「富士山展望台」は、上阿多古フィールドが位置する阿多古川周辺の天竜市商工会阿多古川流域振興会のメンバー(最大時 15 名)との合作であり、展望台設置後の周辺整備(端材の後片付け・遊歩道の補修など)には、農学部森林資源科学科平成 15 年度森林資源科学総合実習履修生 41 名(1 年次学生)が参加した。

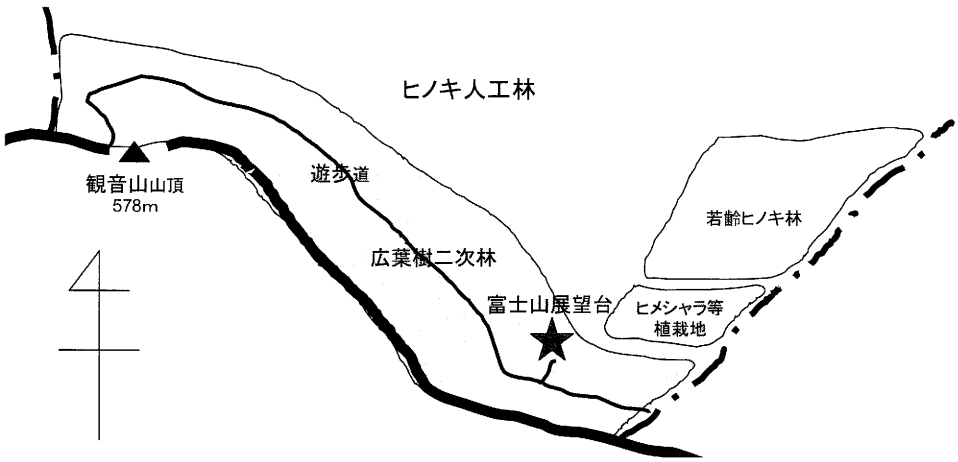
調査・整備対象地と方法

景観整備の対象地は、静岡県浜松市天竜区に位置する静岡大学農学部附属地域フィールドセンター上阿多古フィールド内の観音山（標高 578m）山頂付近(1 林班ヨ小班およびい小班)である。対象地の主な林相は、皆伐後に成立した広葉樹二次林(ヨ小班側、林齢約 65 年)であり、一部に平成元年植栽の広葉樹植栽地(い小班側)などを含む。整備対象地の調査および修景計画案の作成、計画案に沿った修景の実行は、平成 13～15 年度に進めた。主な調査・実行項目は、①遊歩道のルート設定・整備、②遊歩道周辺の樹木の毎木調査(対象は遊歩道から手でつかめる範囲にある樹高 0.3m以上の木本)、③平成元年以降植栽の広葉樹植栽地の毎木調査、④修景コンセプト「富士山も見える森林景観整備」の策定、⑤天竜市商工会阿多古川流域振興会と共同で企画した「富士山展望台」の設置場所の選定、造成、その周辺整備、⑥展望台に誘導する看板の作成などである。

結果と考察

以上のような諸課題の遂行結果のあらましを取りまとめる。

図－1に整備対象地と、造成した富士山展望台、遊歩道の位置などを示した。



図－2　整備対象地と展望台・遊歩道の位置

修景のコンセプト「富士山も見える森林景観整備」は、その「も」の一文字に端的に示されているように、富士山のみをあり難がるのではなく、それを相対化するにたるだけの、様々な出会いに出会いあうことのできる多交通的空間の造成にある。

まず手始めに行ったのは、観音山山頂のベンチの作成・設置である。天竜市商工会阿多古川流域振興会のメンバー7名と共同で、合計4台のベンチを設置した。山頂からは南方に、左から順

に、天竜川、浜松の街並み、佐鳴湖、浜名湖等が見渡せ、遠州灘が望める。海までの距離は、およそ27ｋｍである。

遊歩道は、あらかじめ、対象地を何度も踏査し、楽に歩け、また、なるべく多くの樹木と出会え、そして、やがて富士山の見える箇所にも到達できるように予定ルートを設定したあと、コンパス測量でルートを確定した。ルート確定後、手作業で、ヒノキ間伐材などによる土留め、クワによる整地を行ない、また、展望台に降りる急勾配の坂道には、展望台作りの端材などを用いて階段も設けた。総延長約110m、道幅はおよそ平均0.5mとなった。

表－１　遊歩道沿いの樹種別胸高直径階別本数表(広葉樹天然林、１－ヨ小班)

樹種/DBH(cm)	0	～0.5	～1	～2	～3	～4	～5	～10	～15	～20	～25	～30	～35	～40	合計	最大直径
アカマツ									1	3	4	4	2	5	19	37.2
コナラ								1	3	7	6	7	2		26	32.4
アカガシ	6		1	1				3	4	3	1	1			20	26.2
スギ	1							1			1				3	22.2
ヤマザクラ									2		1				3	22
イヌシデ						1		1	5	3					10	18.8
アカシデ							1	7	8	2					18	15.5
リョウブ	1					1		10	5						17	12.3
ヒメシャラ				1				4	2						7	14.2
ヤブツバキ	18	5	11	16	12	17	14	47	2						142	10.4
ヒノキ	2	1	1		2		2	1	1						10	14.5
エゴノキ									1						1	14.2
ソヨゴ	1		1			1	3	4	1						11	11.3
ヒサカキ	11	4	12	11	3		1	13							55	9
ホオノキ								2							2	9.4
ウリカエデ								2							2	8.8
サカキ	4		7	1		1	2	1							16	5.2
ゴンズイ	1							1							2	8.8
イヌエンジュ								1							1	7
ヤマモミジ								1							1	6.8
シラキ	1			2		1		1							5	6.4
ツガ							1								1	4.6
イチイガシ							1								1	4.5
シキミ	28	3	18	21	5		1								76	4.5
ヤブニッケイ	1		2	4	2	1									10	3.1
イヌガシ	13	3	7	7	1	1									32	3.5
モミ	2					1									3	3.9
ミツバツツジ						1									1	3.6
アオハダ						1									1	3.5
カゴノキ						1									1	3.4
イヌガヤ	1					1									2	3.1
クロモジ	27	3	2	2	1										35	2.2
ミヤマシキミ	13				1										14	2.6
タブ					1										1	2.5
ヤブムラサキ	15		3	1											19	1.1
ヒイラギ	8	1	1												10	0.6
アラカシ	3	1													4	0.4
カヤ	5														5	—
サンショウ	4														4	—
スダジイ	2														2	—
アセビ	1														1	—
ネズミモチ	1														1	—
ハリギリ	1														1	—
ムラサキシキブ	1														1	—
ヤマウルシ	1														1	—
未同定	6														6	—
全体	179	21	66	67	28	29	26	101	35	18	13	12	4	5	604	37.2

遊歩道沿いの樹木の毎木調査結果(樹種別胸高直径階別本数表)を表－１に示した。合計41種の

樹種が確認できた。その種数は、ヨ小班の広葉樹二次林全域の確認種数 42(寺島、2003)とほぼ一致し、胸高直径 5 cm 以上のみの比較では、42 種中 29 種で、約 70%に相当していた。また、この 29 種は、上阿多古フィールド全域で確認されている全樹種 101 種(自生種、胸高直径５ｃｍ以上のみ；寺嶋、2003；藤本、2007)の 29%に相当し、情報量的にも、多くの樹木と出会えるルートが設定されたといえる。

広葉樹植栽地については、ミズナラ、ブナの成長は不良であったが(野兎害によるところが大きかったと思われる)、ヒメシャラの成長は良好であった(表－３)。この広葉樹植栽地は、見晴らしを良くするため、平成元年に、約 50 年生のヒノキ造林地を皆伐したのち、広葉樹に改植し、その育成をはかり、ヒメシャラなどの赤い樹幹の間から、富士山や南アルプスをさりげなく眺めることのできる修景計画に基づくものであったといえる。しかし、このような風景が開けるようになるには、ヒメシャラの成長は良好であったとはいえ、いまだ本数密度が高く、下枝の枯れ上がりもそれほど進んでいない状況にあることから考えて、まだ最低 10 年はかかると考えられた。

表－２　広葉樹植栽地の樹種別胸高直径階別本数表

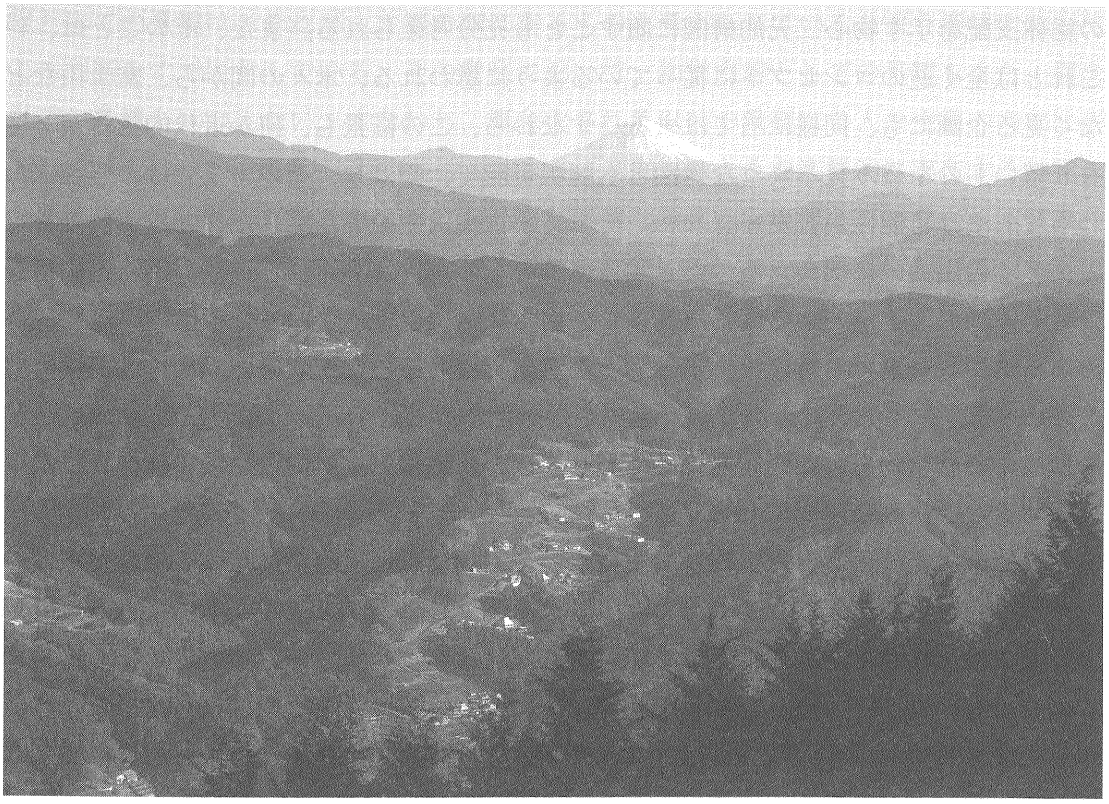
樹種/DBH(cm)	0～	3～	6～	9～	合計
ヒメシャラ	2	28	7	2	39
ミズナラ	26	12	1		39
ナツツバキ	16	13			29
ブナ	12				12
ハリギリ	5				5
合計	61	53	8	2	124

阿多古川流域振興会と共同企画・造成した「富士山展望台」は、振興会のメンバーと論議したうえ、結局、眺望がかなり開け、富士山を真正面に見ることのできる、ヒノキ皆伐地の左後方に設定することにした（図－２、写真－１)。造成に要した立木は、立木材積で、ヒノキ 8.84m^3(当フィールド１林班い２小班ヒノキ人工林(昭和 16 年植栽)からの択伐木)、スギの電柱古材(掛川市より貰い受けたもの)４本、造成・整備に要した人員は、企画調整、後片付けなども含めて、延べ 175 人となった。展望台からの眺めを写真－２に示した。ほぼ 100ｋｍの地点に富士山が望める。看板については、ヒノキ間伐材を使って、遊歩道用に２枚、展望台用に３枚作成し、設定した。展望台を含む景観整備全体に参画した人員の内訳を表－３に示した。

表－３　景観整備に参画した人数

年度	内容	地域振興会	学生	内研究室	職員	合計
13	打ち合わせ	12			3	15
13	山頂整備	0	15	15	2	17
13	作業道補修				8	8
14	打ち合わせ	24	8	8	7	39
14	山頂ベンチ作り	7	5	5	2	14
15	地域聴き取り調査		7	7	2	9
15	遊歩道新設		6	6	2	8
15	打ち合わせ	9			7	16
15	ヒノキ伐採				7	7
15	展望台造成・設置	36	4	4	2	42
15	看板等作成・設置		11	11	4	15
15	後片付け		49	8	4	53
合計		88	105	64	50	243

写真－１　造成・設置した「富士山展望台」



写真－２　展望台からの眺望

総合考察

1．造景の時代の中で

オーギュスタン・ベルグ(1992)によると、今まさに「造景の時代」が到来しているのだという。確かに、このような時代状況は森作りにも如実に現れており、里山整備など森林整備への一般市民の関心の高まりは、単に、里山荒廃といった人間環境の側の状況変化に起因するというよりも、むしろ、人間(市民や若者)の側の、自然に対する距離の取り方の質的変化(その背後には、近代的主観の主観性の了解がある)によるところが大きいと考えられる。近代人固有の、ただ遠くから眺めるだけの時代、それを客観的に分析し、憂えるだけの時代から、自然との距離を縮め、自然との饗宴、共振・共鳴に参加する時代に至っているのであり、「ものづくり」一般への関心の高まりも、このような変化の延長線上に位置付けて評価する必要がある。しかし、ベルグも指摘しているように、このような時代の到来は、必ずしも、同時に、本物の風景が誕生する時代の到来を意味するわけではない。むしろ、少なくとも当面は、露悪な風景を作り上げてしまう時代の到来でもある危険性を常にはらんでいるものと考えられる(藤本、2003)。

以上のような懸念は、本報告で取り上げた、「富士山も見える森林景観」整備の試みにも、充分見て取ることができる。「富士山展望台」は、地域住民と大学・学生によって共同制作された、参加型の造形であるという意味で、充分、「造景の時代」にふさわしい試みと評価できる。しかし、伐開された森林から霊峰富士を真正面に眺望する構図(写真－２参照)は、もし、ただそれだけのものであり、かつ、それ以上の修景上の工夫が何らほどこされないのであるとすると、対象を固定的に浮かび上がらせて立たせる、極めて露悪な風景の展示に過ぎないものとなり、結果的に、自然の総体支配を示す物心二元的構図に堕すことも充分考えられる。また、そのことは、いっけん、これとは全く逆のコンセプトに従っているように思われる、木々の間から、富士山などをさりげなく見る企画にも、同様に当てはまる。すなわち、この修景も、何か近代的主体が、遠くから、有り難いものを盗み見るような構図とも解釈可能で、やはり、そのままでは、悪趣味な修景に終わってしまう可能性が否定できない。そして、富士山や南アルプスだけでなく、森林では、もっと、多くの出会いに出会えるのだとする、筆者らの「富士山も見える森林景観」整備構想全体についても同様のことがいえる。ただ、多くの樹木にも出会えるといった程度のことで、あとは樹木のネームプレートでも付けて完了といった演出で終わるのだとすると、実体性が極めて明瞭で、メジャーな存在である富士山という存在を相対化することなど、到底、不可能である。結局、景観を構成する諸事物を、ただ相対化して見せようとする相対主義的な主観の側の自己満足以外の何ものでもない修景に堕してしまうことになる。

作品の良し悪しを決めるのは、作者の主観なのでもなければ、作品に接する主観でもない。自然の持つ本来的自然性が、どこまで忠実に模倣(ミーメーシス；青山，1995)されているかにあり、そのような模倣に従って、細部に至るまで、どれだけ丁寧に仕上げられているかによって、作品の良し悪しや有用性が決まる。森林景観整備についても、そのことは同様に当てはまる。景観の良し悪しを決めるのは、各人なのではなく、景観という自然の総体をどれだけ忠実に再現しているかにある。そして、真に地域に貢献しうる修景計画であり得るためにも、以上のことは重要である。個々人の好みに従って、整備を進めていくだけでは、良き風景(景観)、地域にとって有用な

風景・景観の造成には繋がらない。地域の人々の単なる個別ニーズに答えるかたちの修景もまた、真の意味での地域貢献・地域振興には繋がらない。そうではなく、それは、景観の持つ自然の本来的あり様を、忠実に再現しているか否かに、ひとえにかかっている事項といえる。本研究で取り上げた、「富士山も見える森林景観」整備を地域振興に真に繋がる試みに仕上げていくためには、以上のような考え方に従って、景観の本来的あり様の再現に向けた、さらに細部に至る工夫が必要となると推察される。

2．主客に先立って開かれる「出会いの連続・出来事の集合」としての景観（＝風景）

一般に、景観生態学では、景観は「ある一定地域内に存在する多様な要素からなる異質な諸部分の総体」(杉村、1993)と見なされている。また、Forman & Godron(1986)によると、景観(landscape)とは、その総体の下地となっている母体、分散して点在するパッチ、そしてそれらを結びつける回廊という三つの部分空間の複合体である。すなわち、これらの見方では、景観は、客観的に存在する事物の集合体、つまり、知覚対象として了解されている。しかし、「景観」は、多義的であり、以上のように、知覚(特に視覚)対象と考えられる一方で、知覚内容（知覚作用によって主観にもたらされた対象像、心的内容）としても了解され、また主観に半ば固定化されるかたちで内在化した対象イメージ（主観的景観）をさす場合も少なくない。しかし、以下に触れるように、実体的なものとして概念化される以前の景観は知覚の対象とも知覚内容とも対象イメージともいえない。

まず、対象イメージとしての景観は、主観によって主導的に導かれたものであるため、それは主観によって概念化された景観そのものであり、概念化される以前の景観とはいえない。また知覚内容としての景観は、それが、主観の側に宿るものと考えられていると言う意味において、主観による判断をすでに含んでいる。その意味において、知覚内容としての景観もまた、概念化される以前の景観とはいえない。すなわち、概念化される以前の景観は各人の主観の内部に形成された何ものかではない。また、それは、「もの」や「空間」のような客観的に実在する知覚の対象でもない。確かに知覚の対象そのものは、いまだ明確な知覚内容を伴っていない（本質存在的なものというよりも、事実存在的なものとして捉えられている）という意味において、知覚内容よりも、より概念化される以前の景観に近いものということはできる。しかし、人間の知覚の対象となるものであるとする概念規定はすでになされており、通常は、それに従って、無意識に、それを主観に先立ってある客観的な事物の総体と考えられている。従って、知覚の対象もまた、本来的に概念化される以前の景観とは見なせない。

つまり、概念化される以前の景観は、各人の主観の外部に客観的に存在する何ものかでもない。そうではなく、概念化される以前の景観は、客観的世界や知覚主観に先立ってある何ものかであり、それ自体から、事後的に客観的世界や主観を生じさせる何ものかである。その意味で、それは、廣松（1981、1988）のいうところの、心身二元分離以前の知覚主観や知覚対象に先立って開かれる現相的(フェノメナルな)世界と類似したものといえるが、それを対象相として捉え返すと、結局、「出会いの連続（出来事の集合）」のようなものとして理解できるようになる(藤本、1999、2003、2008a b、2009ab；藤本他５名、2000 など)。

例えば、景観を「地域」と同義とする考え方がある(武内、1991)。このような見方も、さらに突

き詰めて考えていくと、上述した景観論と、ほぼ同様の結論に到達する。景観は、さしあたりは、「地域(Community)」であるという意味で、ある種の閉鎖的世界を意味しがちな何ものかとして了解可能である。しかしながら、それは、決して他から隔離され、区切られた一地方を構成する閉鎖的世界に留まり続けるものではない。ただ、中央に対する特定の地方として、閉じられてある空間ではあり続けない。究極的には、地域としての景観は、他から隔絶し、閉じられたままで、固定的同一的に存在する何ものかなのではなく、結局、都市に、海に、世界の総体、全宇宙に開かれてある宇宙の総体としての Omniscape(全的景観、全宇宙風景；沼田、1996)のようなものに帰着する何ものかとなる。そこでは、主客不二(能所不二；廣松、1982)が成立しており、局所的な「地域」の風景は、目で見える範囲の風景を指し示しているだけではなく、地域の総体、さらには宇宙の総体を映し出しており、それらはまた、それらに照応して生じる、主観の側の再開示でもあるかたちで開示されていく。すなわち、以上のようにして、主客不二のかたちで開かれ続ける事態の集合こそが、上述したような主客に先立って開かれる「出会いの連続、出来事の集合」(藤本、1999、2003、2008a b、2009ab；藤本他５名、2000 など)としての景観(＝風景)にほかならないと考えられる。

３．展望台の風景を巡って

次には、以上のような、主客不二の風景論を念頭に置き、造成した展望台からの風景を巡って、考えを進めていく。

展望台からの眺めは、さしあたりは、富士山の眺めであり、我々という主観が、客観的事物としての富士山と出会った図式とみてもかまわない。しかし、それでは、曇っていて、富士山が見えない場合はどうであろうか。我々は何ものとも出会えないことになるのか。それとも、富士山が見えないことにがっかりした後、視線を別の事物に転じて、例えば、地域の山並みの中から、秋葉山や竜頭山を発見し、富士山とは出会えなかったが、秋葉山などには出会えたということになるのか。もちろん、このような図式で、景観を理解することも可能である（これが、いわゆるカメラモデルの知覚論に基づく物心二元的判断に相当する；廣松、1981、1988)。しかし、それでは、例えば、目の不自由な人は、展望台に立っても、永久に、何ものにも出会えないことになりはしないか。もちろん、その場合でも、人によって出会うものが違うだけで、目の不自由な人は、他の感覚を通して、我々とは異なる出会いを出会っていると考えることはできる。しかし、このように考えるだけでは、極めて重要な問題が取り残されてしまう。それでは、人によって、出会うものが違っていることになるので、万人に共通した「出会い」はないということになってしまう。確かに、この場合でも、万人に共通した出会いを想定できそうにも思える。それこそが、我々の目の前に広がっている事物の集合体としての景観なのだと考えることができるようにも思われる。しかし、それではことは収まらない。そもそも、ここで問題にしているのは、出会われた出会い自体の万人にとっての共通性の方であり、知覚対象の共通性ではない。ここで、問題にしているのは、たぶん、以下のような問題に帰着する。様々な人々、そして、様々なネコ達を展望台の上に全員集合させたとしよう。そうすると、確かに、ある人は富士山を見て感動するだろうし、へそ曲がりな人物だと、富士山を見て、大あくびをするだけかもしれない。そして、ネコであれば、まさか、富士山を見て、有り難がるなどということは絶対ない。しかし、それでは、

いったい、そこでは、何ら、共通の体験(出会い)はないということになるのだろうか。そうではないはずで、すべての人々に、すべての生きとし生けるものに共通した出会いを出会っているはずなのではないか。しかし、にもかかわらず、物心二元的な図式に従って、風景や景観を、各人(さらには各生物)が各人の頭の中に宿すものと考える限り、そんな万人にとって共通する出会いが成立不可能となってしまうこと、問題にしているのは、以上のような問題なのだといえる。

目を閉じてみると、たぶん、万人にとって共通する風景の一端が了解可能となってくる。目を閉じると、富士山は、あたりまえのこととして、見えなくなる。もちろん、それでも、富士山は目の前にあるのだということはできる。しかし、それは、そのように言明することが可能であることを言っているに過ぎず、確実にあること、目を開ければ、必ず富士山が見えることを意味するわけではない。早い話が、目を閉じている間に、富士山に雲がかかって見えなくなっていることもある。目を長期間閉じているのだとすると、富士山が爆発して、なくなってしまっていたということが起こる可能性も皆無ではない。目を閉じている限り、前にある具体的な事物が確実にあるはずだと判断できる根拠はどこにもない。自然は、時の矢とともに、常に流動してやまないものであり、富士山もまた、いつかは爆発してなくなってしまうはずの存在に過ぎない。そんな流動的で捉えどころがないものこそが、自然や自然景観の本性なのだと考えられる。

従って、目を閉じていても、なおかつ開示されうると言明可能なものは、富士山だとか、南アルプスだとか、竜頭山だとかいった特定の事物なのではないことになり、そう考えていくことによって始めて、万人（さらには生きとし生けるものの総体）に共通した出会いが引き出せるようになってくる。そして、それこそが、様々な事物に先立って開かれる「出会い」であり、人間によって、事後的に、事後的に、事物として捉え返されるかもしれないとしても、さしあたりは、それに先立つ何ものかであるものであり、事物の集合体、地域的コスモスを超えて、全宇宙に開かれた、常に変化してやまない非同一的総体としての多交通的な「出会いの集合」なのだといえる。なお、丹生谷(1996)は、上述に近い考え方(ドゥルーズの影響が顕著に感じられる)に従って、実に美しく、虫達、ネコ達、人間達が互いに無言でコミュニケーションしあう風景を描写している。

以上のように、目を閉じて、五感で風景を感じるようにすると、そんな、主客に先立つ、出会いの連続としての景観、全宇宙風景としての景観、コミュニケーション世界としての風景に出会えるようになる。例えば、パソコンを立ち上げて、カシミール 3D（杉本、2002）で、我々が作った展望台から見えるものを検索してみると、幾つかの面白い事実に気づく。まず、目の前の富士山は、地球が丸いため、いくらか低く見えていることになる。そして、富士山の彼方には、何と東京があり、そして、太平洋に至りつき、さらには、アラスカ方面へと続いていることも確認できる。そして、地球を一周してくれば、それは、風景を感じている己自身に回帰する。しかし、一方で、地球は丸いので、東京は富士山の裾野よりも、はるかに下方に位置し、アラスカはさらに下方に位置していることになる。その意味では、富士山の彼方は、むしろ、大気圏を越えて広がる、己自身も含む宇宙の総体なのだといえる。このように考えていくと、展望台からの眺めは、事物の集合体を超えた、己自身も含む、山、里、海、空のすべてを語る、主客不二(能所不二)の世界であることに思い至る。

以上のように、景観の持つ Omniscape 性、非同一性、能所不二性を了解することで、例えば、

今回取り上げた景観整備対象地において、今後なすべき、具体的工夫なども、おのずから明らかとなってくるものと考えられる。

まず、山頂から下がっていく遊歩道は、ただ単に多くの樹木に出会えるといっただけの工夫と考えてはならない。遊歩道の修景上の意味は、視線の定まらなさにこそある。これは、回遊式庭園を歩かせるように、人を歩かせ、視線をあちこちに向かわせることで、結果的に、事物の集合体を超えた、多交通的な出会いの連続としての風景に至りつかせようとする工夫と考える必要がある。従って、樹木のネームプレートの設置も、視線をあちこちに向けさせることが、当面の狙いとなり、情報量としては、少ないほど良く、その意味で種名だけで充分である。また、樹木だけでなく、その他、生物、無生物を問わず、あらゆる事物・事象に視線を向けさせるプレートの設置も意味を持つ。肉眼では見えないもの、実体が定かでないものは、目を向けさせる対象として特に重要である。肉眼では見えないものとしては、土壌動物も面白い。また、樹種に関することであっても、この地域の潜在自然植生やさらに古い時代の森林を垣間見させてくれるツガ、モミなどに、それなりの説明を入れるといった演出であれば、非実体的なものに目を向けさせる上でも意味を持ってくる。途中、富士山や南アルプスが見える場所に、さりげなく、小さな看板を立て、その旨を示すのも悪くない。

富士山展望台は、その右下に位置する南アルプスも見える眺望や、ヒメシャラの樹幹の間からの覗き見とセットで考えるのも悪くない。そうすることで、互いの長短が補い合えるようになると考えられる。視界の開けた箇所は、宇宙の総体を演出する上で重要な意味を持つ。南アルプスも見える、最も視界の開けた箇所に、何が見えるのか、はるか彼方に何があるのかを示す看板を設置することも演出のひとつとなる。

景観の行き着く先が、互いに共振・共鳴しあえるコミュニケーション世界の総体(主客に先立つ出会いの連続)であるのだとすると、それは、特定の場の具体的整備にあっても、他の場、より広い場へと繋がりあう修景となるべきことを意味している。このように考えると、「富士山も見える森林景観」整備は、一義的には、観音山山頂北斜面を対象域とするものであるとしても、南斜面(国有林側)の修景にも、もっと目を向けていくことが必要となる。海が望める南斜面側の修景と一体となって、始めて、コミュニケーション世界の総体が演出できるようになるものと思われる。平成 14 年度には、阿多古川流域振興会のメンバーと共同で、観音山山頂の古くなっていたベンチを、新しいものにすべく、幾つか作りあげたが、山頂からの眺望を説明する看板も、古くなり過ぎている。また、説明文も実情に合わない。従って、新たな看板を立てるのも一考に値する。現在、観音山を巡り、佐久間町に抜ける広域基幹林道の開通に伴う自然景観整備をどう進めていくかなど、地域振興にとって重要な意味を持つ整備課題がいくつか浮かび上がっている。このような課題との関連を充分意識しつつ、個々の景観整備を進めていくことも、これからの重要な課題となると思われる。

4．風景(＝景観)整備理論の確立に向けて

すでに触れたように、地域振興に向けて地域の景観(＝風景)整備を進めていくためには、これからの時代を担い得る風景論、風景整備理論を前提として臨む必要がある。

確かに、現代という時代は、多くの人々が、考え悩むよりも、とにかく体を動かして造ってみ

ようとする「造景の時代」、「もの作りの時代」に突入している。しかし、また、すでに触れた通り、造景の時代の到来は露悪な風景を作ってしまいがちな時代の到来でもあった。数多くの人々が、森作り、景観づくり、造景に参画し始め、良き風景を作ろうとしているのだとしても、もし、それが、これからの時代に即した基礎理論を前提することなく展開されているのだとすると、意に反して、結果的に、露悪な風景の山を築いてしまうことも、おおいにあり得ることになる。言い換えると、試行錯誤の時代が長く続くだろうことを覚悟しておく必要がある。例えば、もし、すでに、森作り、景観づくりのノウハウが、およそ出来上がっていると考えるのだとすると、それは大きな誤解である。現在では、森林整備や森林管理などについての数多くのマニュアル本が出版されている(例えば、中川(2004)、河原(2001)などはそんなマニュアル本の中の好著といえる)。森林整備、風景整備には、様々な知識やノウハウを必要とする。従って、幅広い知識と長い経験に基づいて綴られたマニュアル本が、森作りを進めていく上で、極めて貴重な情報を提供してくれていることは疑い得ない。しかしながら、そのことは何も、森作り、景観整備法の基本がすでに出来上がっていることを意味するわけではない。真に次世代に通用する森作り、景観作りを行なっていくためには、それを推し進めるための確固とした基礎理論が前提されていなければならず、このような基礎理論の絶え間ない再吟味が必須となる。言い換えると、実践面での試行錯誤とともに、理論面での試行錯誤を常に前提としていくことで、真に地域に貢献し得る森作り、森林景観作りが可能になってくるものと推察される。

筆者らは、以上のような考え方に沿って、主客に先立って開かれる「出会いの連続」としての風景論、そんな風景論に見合った風景整備論などを展開してきた(藤本、1999、2003、2008a b、2009ab など)。展開してきた風景論・風景整備論の骨子は、風景(＝景観)を、物心二元論を超える観点から、主客に先立って開かれる現相的世界(廣松、1982、1988)に求めるべきこと、このような「出会い」の世界は、様々なもの(そこに住むもの、住まないもの、実体が定かであるもの、定かでないものなど)が出入りする「賑やか」な「多交通」的世界であり、そんな風景の中で、風景に対峙している人々や自然的世界の総体が、互いに共振・共鳴しあいながら、明るく力強く、次々と別様のかたちに開きなおされ、リフレッシュ・リクリエイトされるような風景整備を目指すべきことなどにあるが、今後に残された課題も少なくない。このような今後の課題については、これまでにも、賑やかな諸風景の共振的開示を可能とする生態学理論(具体的には、「非競合・非定着的戦略」の可能性など)の数理生態学的検証や、廣松、ドゥルーズなどを充分参照した、主観・客観図式を超える環境倫理学、すなわち「風景倫理学」の確立、さらには、これら文理の両面を風景(＝景観)の観点から統合した「風景の生態学」の確立の重要性などを指摘してきたが(藤本、2009b)、地域における諸景観の実際的整備の面から見ると、以上のような基礎理論を前提とした、個別景観の整備指針の設定法の検討や、それらの個別景観整備を地域の総体風景の開示・整備に活かしていくための方途の検討など、より具体的な景観整備理論の確立が、今後の重要な課題となる。

このような、より具体的な景観整備法について考えると、まず、個別景観の整備については、多様な形態の整備が許容されていることを前提にして考える必要がある。「造景の時代」の到来の観点からも、さしあたりは、様々な試みが許容されていることになる。「生産の森」もあれば、「原始の森」、「情報の森」もあってよい(藤本、2003、2008a)。その意味では、富士山のみを見ようと

する景観整備も、個別景観整備としては、意味ある試みとなり得る。言い換えると、個別の修景にあっては、これまで展開してきたような「主客に先立つ風景論」は、必ずしも、整備の前提条件とはならない。物心二元論図式に従った「客観的事物の集合体」としての景観の整備も、依然として重要な意味を持っていることになる。もちろん、森林景観のような自然景観は「生態系」でもあり、その劣化は、地域社会やさらには人間社会全体に多大な損失をもたらす。従って、いわゆる「生態系サービス」(マーテン、2005)の極度な劣化を招く修景は慎まなければならない。また、部分における修景であっても、例え修景箇所において、多様な「生態系サービス」の多くが失われるとしても、修景箇所を含む地域の総体風景の活性化を高め得る修景を目指す必要はあると考えられる。しかしながら、個別の修景・整備の方向は、基本的には、整備主体の意向に大幅に任された事項であることに相違はない。整備主体(修景計画者)の試行錯誤的な自由な造景の繰り返しの果てにこそ、明るく力強い風景の総体が開示されるようになるものと考えられる。

従って、個別風景の整備にあって、これまで展開してきたような、「主客不二」で開かれる風景論や、このような風景論に従った風景整備が展開されるのは、当面は、一部の修景のみにおいてに過ぎないことになる。そのため、このような、「主客に先立って開かれる出会いの連続」としての風景を全体に波及させようとしていくためには、一部において開かれる「不二」の風景の整備を、他へと転生・伝播していくに足るだけの啓発的内容を持ったものにすることが必須となる。

このことに関連して、本稿で取り上げた、今後の観音山での主客不二の景観整備の方向について、もう少し考えを進めておく。ここでの景観整備が、主客不二の風景の開示に成功し、また、それが、地域の総体に伝播していくようになるためには、すでに触れたように、まず、より広い場へと繋がりあう修景となる必要がある。その意味で、山頂付近での景観整備が、富士山等を望む北斜面側(上阿多古フィールド側)に特定されることなく、海が望める南斜面側の修景と一体となって進められることには大きな意味があるが、それだけではまだ充分ではない。山と海、さらには世界の総体に臨めるようになるだけでは、主客不二の総体風景は開かれえない。主客不二の風景が開かれ、さらにそれが地域の総体風景へと転化していくようになるためには、さらなる工夫が必要となる。藤本(2008ｂ)では、愛知万博会場の景観整備案に仮託して、静大上阿多古フィールド全域の森林景観を、「木材生産や森林整備・管理といった近代的試みや、森林浴といった狭義の癒し空間などを内包しているとしても、むしろ、比叡山や高野山、鞍馬山など、山岳修行の場に近い野外ミュージアム」へと整備すべきことを示唆した。すなわち、このような「山岳修行の場」的な風景を持ち込むことも、今後の観音山の風景整備を考える上で一考に値する事項といえる。観音山は、本来、遠州磐田から山を越えて南信州にいたる交通の要所に位置し、また、その名にも残されているとおり、本来、観音信仰や山岳信仰(修験道)の霊場で、江戸時代には引佐三十三箇所のひとつに数えられていたとされ、現在でも、山頂近くに、「観音堂」や「犬神堂」が残されている(引佐町、1991)。海に臨む浜松や磐田など、遠州(遠江)の里にとっては、観音山は重要な山岳聖地のひとつであったと考えられ、そんな聖地を越えて、さらに山道を進むと、やがては南信州に辿りつく。このような、山(森林)、里、海を多交通的に繋ぐ交通の要所であり、能所不二的思想の結節点でもあった観音山は、ある種の「山岳修行の場」に再整備できる下地を充分持った場といえ、修景次第で、「山岳修行の場」に充分復元可能な場であるものと考えられる。

もちろん、ここでいう「修行の場」は、狭義の意味での宗教的修行の場を意味するものでは決してない。さしあたりは、広義の「フィールド体験の場」を意味しているに過ぎない。今日のフィールド体験教育は、近代以降の科学・技術の導入期教育に終わってしまっていることがしばしばで、その意味で、「客観的事物の集合体としての自然」の実体験教育の域を殆ど出ていないが、本来、フィールド体験は、「導入期教育に必要なだけではなく、学問の終着点でもあり、究極の知を、修練の果てに体得しようとする知的試み」(藤本、2008b)であるべきものといえる。その意味では、「体験学習の場は山岳修業的な苦行の場となる」必要がある。すなわち、このように考えていくとき、すでに、古代において、実践的修行・自然の総体との対話を通して、主客不二の思考パターンをかなりの程度まで明確化させていた密教哲学や、その先駆形態を留める山岳修行者たちの哲学が、例え、今日的にみれば、不充分なところがあるとしても、充分拝聴するに値する内容を持っていたことを認めざるをえなくなる。そして、そのことは即、これらの知的生産やその修行法、その歴史的遺産などに充分配慮して、景観整備を進めることが、主客不二的風景の開示やその全体への波及の、極めて重要な前提条件のひとつとなるだろうことを意味している。宗教的アナクロニズムは避けなければならないが、その根底にある良き理念や方法には充分学んでいく必要がある。

最後に、以上のような方向性を持った景観整備の具体的工夫としては、まず、回峰ルートの設定・整備が考えられる。このようなルートとしては、上阿多古フィールド庁舎を出て、西阿多古川を素足で渡り、巨石の多い、すべり石沢を上り詰めて、滝(1林班を小班)、「原始の森」復元試験地(藤本、2009a)、そして、「森林ステーション(藤本、1999)」に至るアプローチのためのルートと、「森林ステーション」から「山の神」に至り、山の神→上阿多古フィールド西端→「観音堂」および「犬神堂」→山頂→「富士山展望台」→遊歩道→山頂→山の神と回遊していくルートなどが考えられる。整備に関しては、「山の神」の社(祠)の修繕、「いもりヶ池」の復元、各所への看板の設置など、考えられる課題は少なくない。祠を含む「山の神」は、12年前(平成9年度末)に、上阿多古フィールドによって造成・整備した空間であるが、階段など、多分に老朽化が進んでいるので修復の必要がある。また、祠の屋根はまだトタン葺きであり、檜皮葺きあたりに変えるのも悪くない。「いもりヶ池」は、10年ほど前までは、山頂から観音堂に至る道沿いに存在していた小沼(水溜り)であるが、土石の堆積によって、現在は原形を留めていない。小さな沼ではあるが、不可思議さ・非日常性を秘めた箇所であったといえ、復元が望まれる。看板については、様々なものが考えられるが、充分記述内容を吟味した、「修行の場」に相応しいものを設けることが必要である。山頂や、「観音堂」、「犬神堂」にも、すでに看板が立てられているが、子供向け、一般向けの、ありきたりの内容に留まっている。例えば、「観音堂」は、修験者がまつった「観自在菩薩(観音菩薩、āryābalokiteŝvara bodhisattva)」のお堂とされているが(ただし、現在のものはその復元)、現在の看板では、山の名とまでなっている「観自在菩薩」の何であるかを伝える内容にはなっていない。「観自在菩薩」は、能所不二、理智不二を、明確に了解した、最初の人物の名として、たぶん了解される。空海も、それが「観自在菩薩」の「悟りの教え(三摩地門)」であると断った上で、「智は、能達を挙げ、得は、所証に名づく。既に理智を泯ずれば」とか、「一道に能所を泯ずれば、三車即ち帰黙す」などと記して、その旨を伝えている(頼富、2004)。すなわち、観自在菩薩、観音山の名の由来とも関わらせながら、能所不二の歴史を伝える看板を立てることも、決して、宗教的アナク

ロニズムとはならないと考えられる。

引用文献

青山昌文(1995)：美と芸術の理論．日本放送出版協会．

Forman, R. T. T. & Godron, M.(1986)：Landscape Ecology. Wiley & Sons.

藤本征司(1999)：静岡大学上阿多古演習林での試み．森の公開講座．東京農工大学編、291-296.

藤本征司・他５名(2000)：野外ミュージアム「賑わいの森」－森で何に出会えるか．ここから始まる森世紀 2005 年日本国際博覧会に関するアイデア事例集、44

藤本征司(2003)：里山の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する総合的研究．1999 年度～2002 年度科学研究補助金(基盤研究(C)(１))研究成果報告書．

藤本征司（2008a)：里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究（Ⅰ）—研究対象地の概要と整備案の提示—．静大演習林報告、32、127-144.

藤本征司（2008b)：里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究(Ⅱ)—野外ミュージアム「賑わいの森」—静大演報、32、155-170.

藤本征司(2009a)：里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究（Ⅲ）—「原始の森」の復元について—．静大演報、33、1-16.

藤本征司(2009b)：非競合・非定着的戦略理論の再構成—脱近代的風景の協働的開示を可能にする戦略図式への組み換え—静大演報、33、45-73.

廣松渉（1982)：存在と意味（第一巻)．岩波書店．

廣松渉(1988)：哲学入門一歩前．講談社

引佐町(1991)：引佐町史．引佐町

河原輝彦(2001)：多様な森林の育成と管理．東京農大出版会．

マーテン(2005、天野明弘監訳・関本秀一訳)：ヒューマン・エコロジー入門．有斐閣．(Marten, G.G.(2001)：Human Ecology. Earthscan).

中川重年(2004)：森作りのテキストブック－市民による里山林・人工林管理マニュアル．山と渓谷社．

丹生谷貴志(1996)：持続と記憶－砂漠のイマージュー．現代思想、Vol.24-1、132-143、青土社．

沼田真(1996)：景相生態学—ランドスケープ・エコロジー入門．朝倉書店．

オーギュスタン・ベルグ(1992)：日本の風景・西洋の景観．講談社．

杉本智彦（2002)：カシミール 3D 入門、実業之日本社．

杉村乾(1993)：ランドスケープエコロジーの見方・考え方、林業技術、617,34-36.

武内和彦(1991)：地域の生態学．朝倉書店．

寺嶋泰子(2003)：暖温帯里山域における高木類の多様性とその情報資源化－上阿多古フィールドでの事例研究．2002 年度静岡大学農学部卒論．

頼富本宏訳注(2004)：空海・般若心経秘鍵．宮坂宥勝監修(2004)「空海コレクション２」．ちくま学芸文庫所収．